

ムカシの競馬を読む

平成17年・札幌競馬場
札幌記念
優勝馬：ヘヴンリーロマンス

© JRA



第120回 10年・20年・30年前の8月



今回は10年前・20年前・30年前の8月を対象に原稿を進めていく。いまから10年前 平成17年の8月といえば、後に天皇賞秋を制するヘヴンリーロマンスが札幌記念を勝っているほか、レクレードールがケイーンSを、メイショウカイドウが小倉記念を勝つなどしている。

8月なのでJRAのG1は無いが、実はこの月に日本調教馬が出走したG1が実施されている。平成17年8月17日付の日経新聞から引用しよう。

「英國競馬の第34回インターナショナル・ステークス(2080メートル芝7頭G1)は16日、ノースヨークシャー州のヨーク競馬場で行われ、武豊騎乗のゼンノロブロイ(5歳牡馬、藤沢和雄厩舎)は2着だった。優勝は今年のイタリアG1ミラノ大賞を制したエレクトロキュー(シヨースト(M.キネーン騎乗))。勝ち馬との着差はクビ差。僅差で大きなタイトルを逃した。ヨーク

の馬場はイギリスの中では時計も速く日本馬に向くと言われているが、日本人の間でブランド力のある大レースが少ないため、その後の遠征が実現していない。なにかよい馬がいたら行つてほしいものである。

ちなみにこの参戦時、ゼンノロブロイはベストターンアウト賞を受賞していた。最もよく仕上げられた馬に送られる賞だが、大レースに出る馬はみんなそれなりに仕上げているもの。遠来の客をねぎらう意味もあつたのだろう。ちなみにグリーンファーム所属馬でも、アーリヴィングのドバイ遠征時にUTAでアウト賞を受賞している(AE1000ギニーにおいてベストターンアウト賞を受賞している(正確には、小笠厩舎の坂田厩務員に送られた)。

競馬発祥の地イギリスで行われたG1の話題から、次の出来事は一気に地味な話題に。まずは28日のデイリースポーツから引用しよう。

この月には地方競馬で悲しい事故が起きていた。平成7年8月18日の日刊スポーツから引用しよう。

「調教を終えて厩舎に戻る途中の馬と厩務員が車にはねられ、馬が死亡、厩務員が重症を負う交通事故が17日、栃木県宇都宮市で起つた。死亡したのは栃木県・宇都宮競馬場所属のオープン馬力ネユタカオ一で、平成3年の栃木(宇都宮、足利)3冠を制した地元の人気馬だった」

最近でも馬が公道に出てしまつ放馬事故はあるが、この場合は人が騎乗してての事故(宇都宮はコースと厩舎の行き来に公道を歩く形になっていた)。記事によると、衝突した自動車側の前方不注意が原因らしい。

当時の栃木は廃止間際と違い、賞金もそれなりのもの。3冠を制した年にカネユタカオ一は5000万円以上稼いでおり、事故の前年も1650万円を得ていた。今まで南関東以外で出ようがない「地方競馬の1億円馬」になる直前の悲劇だった。

カネユタカオ一の名はその後宇都宮の重賞、カネユタカオ一記念に残ることなつたが、その宇都宮

ムカシの競馬を読む



1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレーダー。大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

須田鷹雄

ば、この試みも無駄ではなかつたことになる。

続いて20年前、平成7年の8月。この月には地方競馬で悲しい事故が起きていた。平成7年8月18日の日刊スポーツから引用しよう。

「調教を終えて厩舎に戻る途中の馬と厩務員が車にはねられ、馬が死亡、厩務員が重症を負う交通事故が17日、栃木県宇都宮市で起つた。死亡したのは栃木県・宇都宮競馬場所属のオープン馬力ネユタカオ一で、平成3年の栃木(宇都宮、足利)3冠を制した地元の人気馬だった」

最近でも馬が公道に出てしまつ放馬事故はあるが、この場合は人が騎乗してての事故(宇都宮はコースと厩舎の行き来に公道を歩く形になっていた)。記事によると、衝突した自動車側の前方不注意が原因らしい。

当時の栃木は廃止間際と違い、賞金もそれなりのもの。3冠を制した年にカネユタカオ一は5000万円以上稼いでおり、事故の前年も1650万円を得ていた。今まで南関東以外で出ようがない「地方競馬の1億円馬」になる直前の悲劇だった。

カネユタカオ一の名はその後宇都宮の重賞、カネユタカオ一記念に残ることなつたが、その宇都宮

ば、この試みも無駄ではなかつたことになる。

続いて20年前、平成7年の8月。この月には地方競馬で悲しい事故が起きていた。平成7年8月18日の日刊スポーツから引用しよう。

「調教を終えて厩舎に戻る途中の馬と厩務員が車にはねられ、馬が死亡、厩務員が重症を負う交通事故が17日、栃木県宇都宮市で起つた。死亡したのは栃木県・宇都宮競馬場所属のオープン馬力ネユタカオ一で、平成3年の栃木(宇都宮、足利)3冠を制した地元の人気馬だった」

最近でも馬が公道に出てしまつ放馬事故はあるが、この場合は人が騎乗してての事故(宇都宮はコースと厩舎の行き来に公道を歩く形になっていた)。記事によると、衝突した自動車側の前方不注意が原因らしい。

当時の栃木は廃止間際と違い、賞金もそれなりのもの。3冠を制した年にカネユタカオ一は5000万円以上稼いでおり、事故の前年も1650万円を得ていた。今まで南関東以外で出ようがない「地方競馬の1億円馬」になる直前の悲劇だった。

カネユタカオ一の名はその後宇都宮の重賞、カネユタカオ一記念に残ることなつたが、その宇都宮

競馬も最終的には廃止。すべて人々の記憶の中にのみ残ることとなつてしまつた。

続いて、いまから30年前、昭和60年の8月から出来事を2つお届けしよう。まずは海外の話題。8月2日の中日スポーツより。

「シリウスシンボリも出走を予定していたバドワイザーミリオン競走を間に控えていた米国のアーリントン競馬場で火事があり、スタンド、クラブハウスが全焼した。このため同レースの開催も微妙。違う競馬場に移して行われるかどうかも今どきのところ決まっていない」

幸い、この火災による厩舎地区への被害はなかつた。焼け落ちたのはいわゆるスタンド部分である。直後の開催はホーソーン競馬場に移されたが、関係者はバドワイザーミリオン(現アーリントンミリオン)を予定通り実施すべく努力し、同レースはアーリントンで行われた(結局シリウスシンボリは回避し、バーデン大賞に出走して4着)。ただ、施設のダメージは大きく、最終的に完全な再開に至つたのは平成元年になつてからのことである。

その後アーリントン競馬場は約2年の一時閉鎖やチャーチルダウニズグループ入りを経て平成14年にはブリーダーズカップを開催

的中率は超破格!? 高知競馬場で3頭立ての超短距離戦(1.5R)が27日スタートした。勝馬投票券は単勝のみという全国初の試み。結果、1Rは2番人気のバンナフラッパーが逃げ切り、5Rは1番人気のムラサキシキブが直線競り勝つて人気に応えた。配当金はそれぞれ210円と160円。28日も1.5Rで実施する)

記事によると、第1Rの売得金は55万円で通常時の6割強、第5Rは114万円で4割強と、通常時よりも大きくなつてしまつたようだ。出走手当てが3頭分しかかからないことを考えて、これでは成功とは言い難い。ちなみに翌日行われた2回目の試みでは2番人気と1番人気が勝つて、配当は230円と160円だった。

この試みは9月にも行われ、その際は第1Rと第2Rで実施。3頭立て3番人気が勝つレース(配当430円)もひとつ実現したがやはり盛り上がりながらなつた。

とはいってもこの件は高知の主催者のやる気は反映している。こういった攻めの気持ちが後のナイターやJRAとの好連携に繋がつたと思えた。

最後はまた地方競馬に戻つてぐつ地味な話題に。9日付の朝日新聞から引用する。

「馬券払い戻しのお札の勘定でけんじょう炎になつた」として園田や姫路の競馬場の窓口係(筆者注:本名割愛)が勤め先の県競馬組合を相手に350万円の損害賠償を求めた訴訟で、神戸地裁の中川敏男裁判長は『発症を防止するための対策をとつていなかつた』と言ひ分をほぼ認め、240万円を支払うよう命じた』

この時代でもまだお札の計数機は無かつたようである。一方、馬券はまだ地方だとユーツト券も導入されていない時代。お客様は全員現金投票でしかも本場ばかり。有名なスマノダイドウ事件が昭和49年だから、おそらくこの人も勤務中。確かに指腕から神経まで、すべてが消耗していくそぞろな現場ではある。